

# 人新世って知っていますか？

2021-1-25 野口幹夫

## 0. 人新世って知っていますか？

人新世（ひとしんせい）という言葉が最近聞かれた方は多いと思います。私はジャーナリストの造語だろうと思っていましたが、れっきとした世界の地質学会で数年前に提案され、研究されている定義だそうです。

「人新世」は46億年の地球の歴史の中で、人間が地球そのものにはっきりとした変化を与え始めた時代、しかし、決して人間が誇るべき時代ではないのです。生命の絶滅への時代の始まりを示唆する怖ろしい名前なのだそうです。

2021年2月号の雑誌「世界」の特集は「大絶滅の時代」です。

『地球生命は過去6回の大絶滅期を経ている。5回目が白亜紀末の巨大隕石の衝突による恐竜の絶滅である。6度目にして過去最大の大絶滅が今私たちの目前で、私たち自身の手によって、引き起こされつつある。人新世である。パンデミックの時代に生態系と自然環境をめぐる私たちの責任を考える。』

## 1. コロナは人新世の贈り物

今世界を一変させた新型コロナウイルス禍は、始め武漢で変な動物を食べたから、偶然に始まり隠していたために瞬く間にひろがったと位に考えていました。

いまこのウイルスパンデミックは、世界の人々の往来を絶ち、自由主義グローバリズム資本主義に明確なストップを掛け、成長する経済を一挙に停滞に導きました。まさに神の一撃です。そしてその発生が単なる偶然の事故ではなく、「人新世」の必然的な副産物と見る見方が出てきました。その意味を全く別な見方から考える必要があります。

## 2. NHKの「欲望の資本主義」 資本主義の後も資本主義

NHK がシリーズで「欲望の資本主義」というドキュメント番組を 2 年越しでやっています。今年の正月にはその特番「格差拡大 社会の深部に亀裂が走る時」をやっていました。ご覧になられた方も多いと思います。どのシリーズも今の資本主義が新自由主義グローバリズムの衣を着て世界を席卷し、そこで恐るべき格差社会を生み出し、日本の中流階層の消滅の危機という警鐘を鳴らしていました。何時もこの番組は、問題提起はよくできていると思いつつ、欠かさず見えています。しかしその解決方向については何も示さず、失望します。今回も資本主義が根本原因としつつ、資本主義の後は共産主義という図式が消え去ったために、資本主義の後も多様な資本主義だ、選択肢は北欧型、米国型、そして禅的資本主義？というわけのわからない内容で終わりました。人々に絶望をプレゼントするだけでした。

## 2. 人新世の「資本論」 バロセロナが突破口

ここに彗星のごとき快著が現れました。朝日新聞の 1 月 16 日の書評欄に東大教授の本田由紀さんが、売れている本、魅力のある本、明快な内容と紹介しました。私も読んでみました。私が今日これを書いて、高津の同窓生にご紹介しなければと思い立ったのはこの本によるものです。著者の斉藤幸平氏はこのように言います。

『人新世の、地球環境変化は資本主義がもたらしたものだ。地球を救うためには資本主義を離脱し、「脱成長コミュニズム」社会へと進むほかない。そこでは、自然環境はもとよりエネルギーや生産手段など生活に不可欠な社会資産（コモンと呼ぶ）を民衆の手で共同管理する社会だ。』

そこ迄は、なるほどと共感するが、そんなことはどうやってできるの？と思うが、その先が驚きます。

人間は動き出しているとして、著者の斉藤幸平氏があげるのは、スペイン・バルセロナの動きです。日本では例のガウディの町、スペインからの独立運動で知られる町です。独立運動は棚上げになりましたが、代わって 2015 年市長になったのがバロセロナ・コモンズという市民運動の地域政党です。経済危機下での家賃を払えなくなった住民の住居強制退去などと闘い、市民の

社会的権利を拡大するために結成した市民連合がバロセロナ・コモンです。ミュニシパリズム(市民自治?)と名乗り、今欧州の各地にこの運動が飛び火しています。ナポリ、グルノーブル、アムステルダム、パリ、コペンハーゲン等々。

ウィキペディアでミュニシパリズムを調べると、このように書かれています。『ミュニシパリズムの自治体は「利潤と市場の法則よりも市民を優先する」という共通の規範を共有している。その意味は、社会的権利の実現のために政治課題の優先順位を決めること、新自由主義を脱却して公益とコモンズの価値を中心に置くことである。

公共サービスの公的所有を推進する、普通の人払える住宅の提供と価格規制をする、環境保全と持続可能なエネルギーを推進するといった具体的な政策がミュニシパリズムの自治体には共通している。とはいえ、そうした革新的な政策だけが目的ではない。創造的な市民の政治参加によって市民権を拡大する過程を重視する。さまざまな方法で直接民主主義的な実験を積極的に行っている。』

斉藤幸平氏はこのミュニシパリズムを最新の姿としつつ、世界では歴史のある労働者協同組合主義が、資本主義に替わる未来の姿であると述べています。

### 3. ネクストシェア ポスト資本主義「協同」プラットフォーム

昨年8月同じく朝日新聞の書評欄でネイサン・シュナイダーの「ネクスト・シェア ポスト資本主義を生み出す「協同」プラットフォーム」(東洋経済新報社)が紹介されました。厚い本でしたが面白くて全部読んだのです。これは、斉藤幸平氏が、資本主義の終焉に替わるものとして提示している協同組合主義の世界中の活動の紹介だったのです。生みの親ヨーロッパばかりでなく、アフリカのケニア、南米のエクアドルなどの共同組合先進国があるようです。またIT社会の中では、GAFAと呼ばれる巨大プラットフォームの協同組合化への展望も述べられていました。しかし私はそれを読んだ時、日本にはなじみのない経済構造だったこともあり(日本では生活協同組合しかない)、その威力が表題のように「ポスト資本主義を生み出す」とは到底

信じられませんでした。

やはりそれは政治権力にせまる社会主義勢力がうまれないと実現性がないかなと思っていました。それで昨年アメリカ大統領選挙に関心が向きました。

#### 4. 大統領選挙の始まりの頃 鍵を握るのはサンダースだ

バイデン新大統領の元でようやくアメリカは希望が戻りつつありますが、昨年の予備選挙の段階ではバイデン氏は苦戦でした。サンダース上院議員が優位だったのです。その頃日本でも1冊の本が出ました、高橋和夫氏の「最終決戦トランプ vs 民主党」という新書本でした、副題が「大統領選撤退も鍵を握るサンダース」で、帯の宣伝文句は「トランプでもバイデンでもない超大国の未来を左右するのはサンダースだ」とあります。

わたしは、しかしサンダースを象徴としつつも、彼を押し上げた支えたアメリカの若者たちの草の根運動に注目したいのです。サンダースチルドレンと呼ばれる人たち例えば AOC と呼ばれるアレクサンドリア・オカシオ・コルテス 30 歳台の女性議員です。

AOC は民主党の議員ですが、元来は「アメリカ民主社会主義協会」に所属し、アメリカで選挙によって社会主義を樹立しようを目指している驚くべき団体です。トランプが、まなじりを上げて「極左集団」とこき下ろしている政治団体なのです。

かつてアメリカでは「社会主義者」とレッテルを張れば、口封じになるほどの禁句だったが、彼らの活動の努力と、またアメリカ国民の現体制への不満もあって、社会主義を目指す方向が草の根レベルで支持を広めています。その党憲章は次の通り。

『我々は社会主義者である。我々は私益に基づいた経済政策、疎外された労働、富と権力の不平等、人種・性別・身分・年齢・出身地・性的指向・宗教・障害などあらゆる差別、暴力や非人道的行為による体制の維持を拒絶する。我々は社会主義者である。我々は資源や生産手段の一元的な管理、計画された経済、公平な再分配、フェミニズム、人種の平等、そして非抑圧的な関係

に基づく人道的な社会秩序に向けた理想を共有している。

我々は社会主義者である。我々は理想を実現する為、アメリカで民主的な社会主義を現実化し、多数派の意見とする為の政治戦略を追及している。我々の戦略はアメリカの階級社会を把握したものであり、それは過大な経済力を持つ階級と大多数の国民との間に利益相反がある事を意味している。』

アメリカでこのようなグループがあり、若者たちの熱意で一定の政治勢力にまで成長していること、今回の大統領選挙に、大きな影響を持ったとはこの本ではじめて知って驚いたのです。

## 5. 中国は地球環境対策を世界に公約した

考えてみれば地球上に資本主義を離脱したと公称している国がいくつもあります。社会主義国です。我が国では総じて悪魔の存在のように忌み嫌われています。これらの国が人権を尊重していないからです。反対党のナバルヌイを逮捕したプーチンロシア、香港の民主派を圧迫する中国、ベトナムやキューバなどです。特に中国は隣国で、唐の時代からも影響を受け続けてきた国なので、好き嫌いはともかく注目しなければならないと思います。

特に地球環境問題に関して言えば、我々が知っていることは、北京のスモッグで、遅れた国というマイナスイメージを持っています。

その中国の習近平が、昨年 9 月に国連総会で初めて、地球環境問題で公約したのです。日本では無視されて誰も知りませんが、アメリカの雑誌 **Foreign Policy** が「**How Xi just Saved the World**」(習近平はいかに地球を救うか)と題した記事を掲載しました。

『 習近平氏は昨年 9/22 の国連総会へビデオメッセージを送りました、「我々は国家の統一した方針として、排出量のピークを 2030 年より前にし、2060 年にはカーボンニュートラル（実質的な排出量ゼロ）を目指します。」習近平氏のこの短い文章は、人類の将来を再定義した可能性があります。それは誇張のように聞こえるかもしれませんが、地球温暖化の世界では、中国の重要性を誇張することは困難です。急速な経済成長と石炭火力への依存が理由で、中国は圧倒的に最大の二酸化炭素排出国となっています。世界全体の約 28%を占め、中国で生産される二酸化炭素は、米国、EU、およびイ

ンドの合計とほぼ同じです。』

中国は社会主義国を目指しているというが、実態は国家資本主義であり、国家が主導して資本主義をやっているのだと酷評する方が多いので、実質はそうかもしれません。しかし私は中国共産党が紆余曲折を経ながらも、100年近くを中国に社会主義国建設の旗印を掲げ、国家を育ててきた、そして反抗勢力を弾圧しながらも、党の強力な方針と実行の元で、この10年でGNPで世界第2の国にまで持ち上げました。今その余裕を得て、党内の腐敗を撲滅と、人民の貧困の撲滅を主要なテーマにあげ、すでにすべての子供の教育機会の国家保証を成し遂げたというニュースを知ることができます。この実行力で、まず電気自動車全面移行のリーダーシップをもって、あの北京のスモッグからの脱出し、世界に炭酸ガス排出量ゼロを目指すとの宣言を出したことは注目すべきだと思います。

菅さんが総理になって、支持率は下がりつつあるようですが、彼の言動で、唯一2050年カーボンニュートラル宣言をしたことは評価したいのですが、ロードマップもなく、産業界からは実現不能との反応が返ってくるなど、実行力は疑問です。

## 6. 我々の世代は人新世をもたらした戦犯

日本の若者の無関心・無力感育てたのはだれか。

長々と書きましたが、コロナ騒ぎが偶然でなく、地球生命の絶滅の危機に入る「人新世」のある意味必然であったと知れば、他人事でなくなりました。それどころではありません、人新世を招いた1960年代の世界の経済成長期に一番活躍したのは我々高齢者集団です。人新世を招いた大戦犯集団に属していたのです。その意識は薄かったことを今自覚しています。では何をすればいいのでしょうか。

まず傍観者としての立場を捨て、脱資本主義の動きに加担することでしょうか。その先はいくつもの道があるようです、斉藤幸平氏の言うコモン運動。不幸なことに日本は消費組合くらいしか協同組合は無かったのです。だから

なかなかその運動を応援することに道はなさそうですが、これからその動きに強く関心を持ち続けます。

また中国はじめとする社会主義国へも、あるいは彼らが先に答に到達するかもしれないとの見方で、注目しましょう。唐の時代以来我が国はその地に学び続けてきたのです。何年か先に心から尊敬できる先生にまたなってくれるなら、日本にとってありがたいはずです。敵視は少なくとも棚上げしましょう。

我々日本の高齢者が被害者意識ばかりで小さくなっているのと同じように、日本の若者も無関心・無力感にひたり保守化し、世界の若者、グレタさんのような、またアメリカの AOC さんのような行動が起きません。そのような若者層をつくったのも責任は我々高齢者です、ぜひお孫さんに働きかけましょう。

それ以外地球を崩壊から救うことはできないのです。

皆さんはどうお考えですか。